

六〇〇号を越えた『詩と眞實』

吉 村 滋

現代専門部会

月刊文芸誌『詩と眞實』（同人二三五名、会員九五名）は、平成十一年五月に六〇〇号記念特集号を出し、同月二十九日NTT熊本会館で祝賀会を開いた。年末には六〇六号になりました。わが国では最も号数の多い同人雑誌である。

『詩と眞實』は昭和二十三年十一月、「熊本ペングラブ」の機関誌として創刊され、荒廃した戦後社会に小さな文化の灯を点して以来、二十八年六月の熊本大水害の折、暫時休刊したほかは、確実に月刊を維持してきた。

初代編集・発行人は伊吹六郎氏（富永彦十郎）で、同氏が東京に移住したあと、永松定氏（ジョイスの『ユリシーズ』を伊藤整氏と

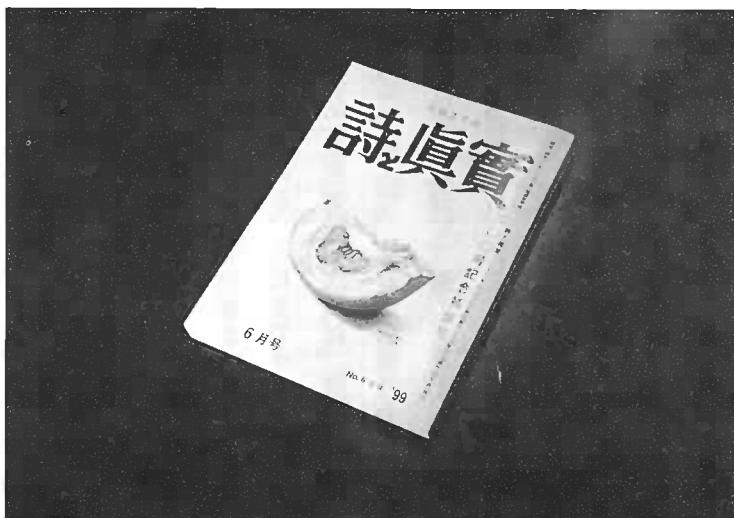
会員九五名）は、平成十一年五月に六〇〇号記念特集号を出し、同月二十九日NTT熊本会館で祝賀会を開いた。年末には六〇六号になりました。わが国では最も号数の多い同人雑誌である。

月刊文芸誌『詩と眞實』（同人二三五名、会員九五名）は、平成十一年五月に六〇〇号記念特集号を出し、同月二十九日NTT熊本会館で祝賀会を開いた。年末には六〇六号になりました。わが国では最も号数の多い同人雑誌である。

熊本の文芸界を振り返ってみると、荒木精田義夫氏の後を継いで、平成三年八月から筆者が編集発行の責務を負っている。



発行日
1999(平成11)年11月30日
編集・発行
熊本市
新熊本市史編纂委員会
熊本市手取本町1-1
市史編纂室
☎328-2038・2903



『詩と眞實』600号記念特集号

之氏主宰の『日本談義』が昭和十三年五月に、月刊の「地方文化総合雑誌」として創刊された。同誌は終戦直前の昭和二十年六月号まで続けられ、一時休刊のあと二十五年十二月号から復刊され、熊本の歴史と伝統をふまえながら、日本の視野に立ち、地方と中央を結びつける文化の広場を構築してきた。しかし昭和五十六年十二月、荒木氏が急逝して、『日本談義』は五十七年四月号で、通巻三七七号をもつて終刊した。

熊本では『阿蘇』『南風』『椎の木』をはじめ、数多くの短歌、俳句、狂句など短文芸の伝統ある雑誌が香り高い文化の歴史を築いてきたが、紙数を要する小説は、『日本談義』

目 次

▽ ▽ 六〇〇号を越えた『詩と眞實』	1
▽ 「史料編第七卷近代Ⅱ」の	
▽ 二種類の壬申地券	
▽ 新発見「田辺籠城図」の史料的価値	4
▽ 「もう一つの関ヶ原合戦」	6
▽ 日誌抄	8
▽ 熊本の中心・新市街交差点の雜踏	9
▽ 史料調査に御協力をいただいた方々	11
▽ 編集後記	12

市史編さんだより

と『詩と眞實』が主にその発表の場となつてききた。

『詩と眞實』は創刊以来、小説、現代詩、評論、隨筆を掲載しており、特に小説と詩の分野で多くの作家を生んできた。光岡明氏が直木賞を受賞したほか、芥川賞候補に坂口露子さん、西村光代さん、飯尾憲士氏、福島次郎氏が、直木賞候補に谷崎照久氏が選ばれたほか、島一春氏が農民文学賞を受けた。また、昭和三十四年に創設された熊日文学賞、四年設置の熊本県民文芸賞のほか九州芸術祭文学賞などに、多数の詩と眞實同人が選ばれている。

一般的にみて、同人雑誌は主義主張を同じくする人たちが集まつて作品を発表する場だが、『詩と眞實』は創刊以来、やや特殊な性格をもつて続けられている。もともと「熊本ペンクラブ」という、広範囲でしかも年齢層の厚い人たちが、作品発表の場を持つため発行された雑誌で、思想的にも、ものごとの価値観も多種多様である。写実的な作品や抽象的な作品が混在し、年齢の老若もあつて、普遍的な同人雑誌の性格を越え、地方にあつて文学を志す人々を育成する使命を持つている

と思う。

六〇〇号記念特集号の巻頭言のなかで、筆者は次のように述べた。

「いま一九九九年という世紀末のさなかに立つて、私たちは物心両面から大きな転換の波に曝されている。これまでサインカードを描いてきた景気変動の図式は、金融ビッグバーン時代への突入で、終身雇用型社会から熾烈な競争社会へ急速に変貌しようとしている。オウム真理教事件、毒入りカレー事件、少年犯罪の凶悪化、麻薬の浸透、性犯罪の俗悪化など、最近の世相にみるものは、救い難い嘔吐を感じさせる。前世紀末には頽廃や虚無的

思想など、精神的な終末感が主流だったが、いま哲学的思索は影をひそめて、『惡の華』は人間の生身に害毒を流し始めている。

人々の価値観が時代とともに変化していくのは当然のことで、文学の世界でもその潮流は流動している。常に新しいものをを目指して模索を続けることこそ、文学を追い求める者の生き甲斐であることは言うまでもない。しかし、人間性本来の温もりが次第に冷却化していく現実のなかで、文学の本質は何か、人々は文学に何を求めているかを、真剣に問い合わせなければならないと思う。」

筆者が『詩と眞實』の同人に参加したのは昭和二十八年一月で、熊本の街には空襲の残骸がまだ残つており、ようやく復興した繁華街にネオンの灯が燃き始めていた。合評会は中央公民館（熊日構内の元建極会館）で開かれ、合評会後の懇親会場は、銀杏通りの「時雨」や「竹葉」だった。その後、市役所裏の「どん底」から上通りの「石松」に移り、さらに船場の「とぎや」から新町の「松葉旅館」と、小料理屋や旅館が会場になつてきた。その懐かしい変遷の模様は、熊本の街の変貌と重なつてゐる。

文学の潮流は変わつても、文学の本質、つまり人間性の真実は不易である。ただし、自然の摂理が軽視され、生物の遺伝子組替えや、果てはクローリン人間、環境破壊による地球の無機化などに拍車がかかれば、何をか言わんやである。



『史料編第七卷近代II』の 発刊に当たつて

近代専門部会

前田信孝



I（既刊）の方針に準じて社会機能的に分類し、次の八章に構成した。

第一章政治 第二章財政一般 第三章都市行政 第四章産業・経済 第五章軍事・警察・消防・空襲 第六章社会 第七章教育 第八

章文化・宗教

前巻史料編『近代I』と異なる点の第一は、都市行政の一章を特設したことである。辛島格熊本市長による「熊本第一期改善私議」の提案を始め、「大熊本市」の建設を目指す周辺町村の合併、市営電車・上水道敷設、歩兵第三聯隊移転の三大事業、市営バスの運行、都市計画事業など、都市近代化の動向を重視したからである。もつとも、町村合併関係史料は行財政一般に位置づけ、都市計画図は付録とした。その他鉄道国有化や軽便鉄道などを私鉄の都市交通関係史料なども収録したが、これも都市化の観点からである。

第二に、本巻では産業・経済・社会・文化の三分野の拡大を図った。産業・経済の分野は研究のより一層の進展が期待される分野であり、文化面で著目されるのは市民文化である。全国的にも著名なジャーナリストや文芸作家も少なくなく、学生の文芸活動や地域的文化運動も盛んとなる。特に量的拡大を図ったのは社会の分野である。前巻『近代I』に比べて約二倍の増頁となつた。この時期、近代化の進展と表裏の関係において種々の社会問題が表面化する。初期社会主義運動と大逆事件、地方改良運動と報徳主義、営業税反対運動、米騒動、小作争議、人力車夫救済問題、労働争議、水平社運動、学生運動などの社会問題・社会運動があり、方面委員制度をはじ

め種々の社会政策も必要となる。伝染病予防を中心とする公衆衛生や移民政策もまた前代に引き続く社会的な課題である。多彩な関係史料を収めることとした。

第三は金融恐慌・大恐慌を経て国家総力戦体制の形成へと向かう昭和期の時代的主調の観点である。金融不安、公私経済緊縮、農村関係史料を産業・経済分野に收め、国家総力戦体制の形成に関する史料は文字どおり各分野にわたる。統制経済、国民同盟の結成、大政翼賛会の成立、部落会・町内会・常会組織、国民精神総動員、戦時教育等々であるが、近代戦に特徴的な防空・空襲関係の史料も収録することとした。

選択の結果を依拠した史料の観点から見ると、「熊本県公文類纂」・「熊本県布達便覽」・「熊本県公報」・「熊本市政資料」・「熊本県公報」など、行政文書に依拠した史料が多くなつたが、基礎的史料としての布達や公報類が刊行されていない今日、その一部なりとも本巻に収録し得たことは一定の意味を持つと考える。熊本市史研究の一助ともなれば幸いであり、さらに本巻所収の史料が多角的な研究テーマとクロスして研究の進展に活用されるならば編者にとつては望外の喜びである。

なお、既刊の『史料編第九卷新聞上近代』には当該期の新聞史料も収めている。本巻と併せて見ていただきたい。

最後になつたが、史料調査及び収録に当たつては多くの機関及び個人の方々に大変お世話をなつた。御厚情に対し心からお礼を申しあげる次第である。

本巻には日露戦争以降太平洋戦争終結までを対象に（分野によつては日露戦争前のものも含む）、三八〇点余の史料を収録した。

編集に当たつては前巻『史料編第六卷近代

二種類の壬申地券

近世専門部会
松本 寿三郎

明治五年二月政府は土地私有を法的に認め、土地の永代売買の禁を解いた。二月二十四日「地券渡方規則」を公布し、土地所有の証として地券によることとし、十月中に完了する

よう指令した。これが発行の年の干支によつて壬申地券と呼ばれるものである。地券証は田畠一筆ごとに一枚作成されるもので地番・面積・所有者のほかに地代金を確定せねばならなかつた。当時の白川県・八代県においては早速地券作成に当たつたが困難を極め、八

表1 白川(熊本)県における壬申地券の発行

発行年月	実施村	
明治6年 8月	託摩郡	竹宮本村
11月	飽田郡	弓削村
明治7年 5月	山本郡	一木村
6月	下益城郡	鰐瀬村
同	上益城郡	梅木村
7月	山鹿郡	小原村
8月	上益城郡	梅木村
10月	上益城郡	川内田村
同	玉名郡	日平村
11月	合志郡	野附村
同	宇土郡	佐野村
12月	上益城郡	櫛島村
同	上益城郡	下早川村
同	上益城郡	山出村
同	合志郡	豊岡村
同	合志郡	上庄村
同	玉名郡	築地村
4月	飽田郡	錢塘村
5月	八代郡	麦島村
12月	八代郡	上松求麻村
明治9年 5月	飽田郡	錢塘村
明治10年 6月	合志郡	豊岡村
明治11年 5月	託摩郡	健軍村
7月	飽田郡	山室村
	上益城郡	早川村

表2 飽託郡新村における旧・新番地の比較

本方田方地引合見図御帳			M 6. 地券調帳					
園田	中田19.18	109 番 慈吉	園田 109	圃田 中田15.18	高石 20748	地代 円 銭	新番 174	
				内 中 4.00	0.532	3.00	175	
々	中田18.24	110 慈兵衛	110	中15.24	2.7014	11.85	176	
				内 中 3.00	0.399	2.25	177	
々	田 36.00	111 同人	111	36.00	4.678) 27.75	178	
々	(下田 外 1.00	40 御寄下添	40	寄下	1.00			
々	田 43.24	112 慈吉	112	21.00	2.743	15.75	179	
				内 0.27	0.1197	0.68	180	
				内 10.27	1.4257	8.18	181	
				内 11.00	1.437	8.25	182	
々	中田24.03	113 権左衛門	113	22.18	3.0058	16.95	183	
				内 1.15	0.1995	1.13	184	
々	(田 15.12	114 同人	114	6.15	0.8905) 5.37	185	
々	(外 中田 0.20	41 永荒添	41	永荒	0.20			
々				内 3.00	0.37911	2.25	186	
				内 0.27	0.09732	0.68	187	
				内 4.12	0.5992	3.30	188	
				内 0.18	0.0798	0.45	189	
々	中田11.12	115 金右衛門	115	11.12	1.5162	8.55	190	
々	(中田29.09	116 助左衛門	116	28.00	3.784) 21.25	191	
々	(中田 0.10 外	42 御寄下添	42	0.10	0.045			
々				116内	1.09	0.1729	0.90	192
々	(中田 9.15	118 傳左衛門	118	9.06	1.2236) 7.15	193	
々	(中田 0.10 外	43 御寄下添	43	0.10	0.045			
々				118内	0.09	0.0399	0.23	194
々	中田13.00	117 傳左衛門	117	13.00	1.729	9.75	195	
々	中田16.24	119 慈次郎	119	16.24	2.2344	12.60	196	

代県では五年七月大蔵省にあてて、永代質地・譲地など所有権の移動において、内緒の質地や口約束の譲地など所有者の確認が容易でないことを理由に、地券渡猶予願を提出している。六年一月十三日白川県参事山田武甫、八代県参事太田黒惟信連名で租税頭陸奥宗光あてに「地券渡月延願」を提出しているから、この時点では両県ともまだ出来ていなかつたと推定される。この一月白川県では広島県伺いに準拠して地券証の木版印刷を申請し、一月十七日付で許可されている。木版の地券は縦三三、五センチ、横四六センチ大判のものであった。(写真A)

壬申地券は一筆ごとに作成されるのであるから膨大な数量になる。したがつていくつかの版木によつて印刷されたものと見えて、活字に異同がある。しかし、用紙の大きさは大

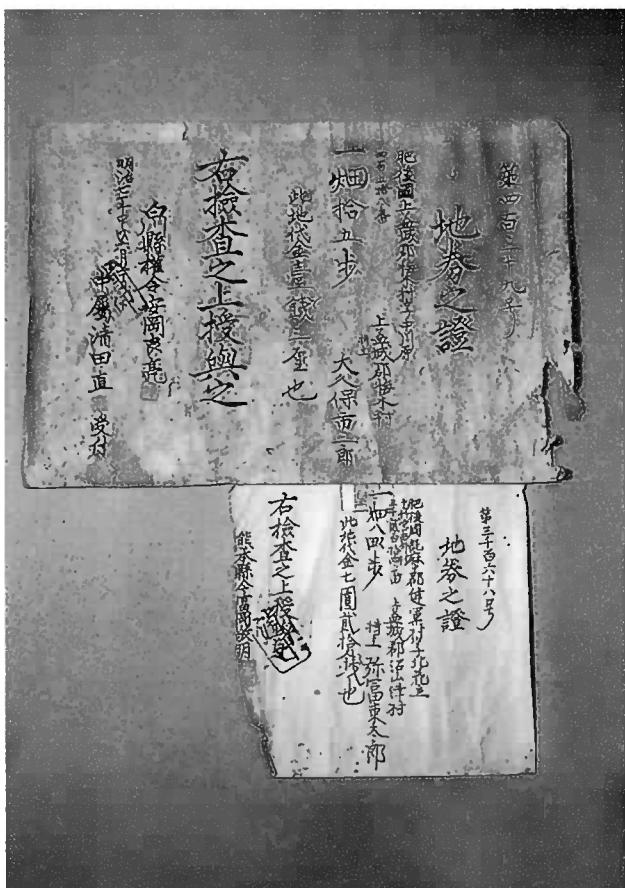
きに異同がある。両県では五年十一月地券掛が任命され、各郡では戸長・副戸長の中から地券取調掛が選ばれ、実務に取り掛つたが、村々で地券台帳が作成されるのは六年三月以後のことであつた。今回熊本市新町の渡辺家から四〇六枚の壬申地券が発見され、壬申地券の発行状況がほほ解明された。現在までに見ることができた地券の発行年月および実施村は表1の通りである。

方一定している。

ところがおそらく西南戦争後だと思われるが、熊本県令富岡敬明の地券にはやや小型のものが見られる（写真B）。縦二三、一センチ、横三三、一センチプラスアルファ（後半部分切断のため不明）である。

この写真Bの地券は今のところ二通しか発見されていないが、熊本県令富岡敬明の署名がある。明治十一年五月と七月の地券はAと同じ規格であるがBの二通は託摩郡のものである。西南戦争の後のこととで紙が不足したのかも知れない。今後検討を要する。

写真A



写真B

(明治六年一月合併) の地券は六年八月から十一年に発行されているということである。村ごとに地券台帳を作成したが、この台帳は天保の再地引合地推帳を基にして作成された。ちなみに、再地引合帳はほとんど宝暦の地引合帳を丸写ししているので、実質的には、宝暦の地引合帳と合致するといつてもよい。飽田郡新村園田の地引合の地番と「地券調帳」の地番を示せば表2の如くである。宝暦地引合の地番を基にしており、地券調帳においては、分筆した部分を追加して新しい地番が設定されたのである。「地券之證」において字番と記される地番はここで新たに設定された

地番であろう。（地券調帳には当然土地所有者名が記されているが、ここでは地番がいかにして付されたかを見るだけなので省略した）。

がなされ、一筆ごとの地価の算定がなされた。村々の耕地には著しい伸びが見られる。この結果が「改正地券」となったのである。壬申地券には「消印」が付されているが、これは改正地券の出現によつて、壬申地券は効力を失つたからである。

地券調帳は地代金を設定するためにその基礎となる分米を書き上げている。この村の地券台帳は残されていないが、台帳を兼ねる役割をしたと思われる。

一地所売買譲渡二仕
地券渡方規則には
「地券台帳ハ二ツ折帳
ニ仕立、半枚ニ二筆宛

県内各地に残つてゐる明治八年以後の「字……」
「筆限地検幅」は測量図を伴つており、地租
改正事業の厳密さを示すものである。田畠一
筆ごとに宝暦以来の伝統的な地番を離れた新
しい地番が設定された。当時飽田郡柿原村は
池龜村と合併して柿原村を称していくが、柿
原村字前田の地番は前回の地番と大きく異なつ
て設定された。この地番は土地台帳に引き継
がれ、今日の地番にも継承されている。

記載シ、券状ト割印可致置事」となつてゐるが、「山本郡辺田野村地券台帳」は一ページに三筆ずつ記載する。地番・田畠・面積・持主と地代金、それに新地番が書き入れられてゐる。以上のものは地引合帳を踏襲しており、この時点での測量はなされていない。

新発見「田辺籠城図」の 史料的価値

—もう一つの関ヶ原合戦—

近世専門部会

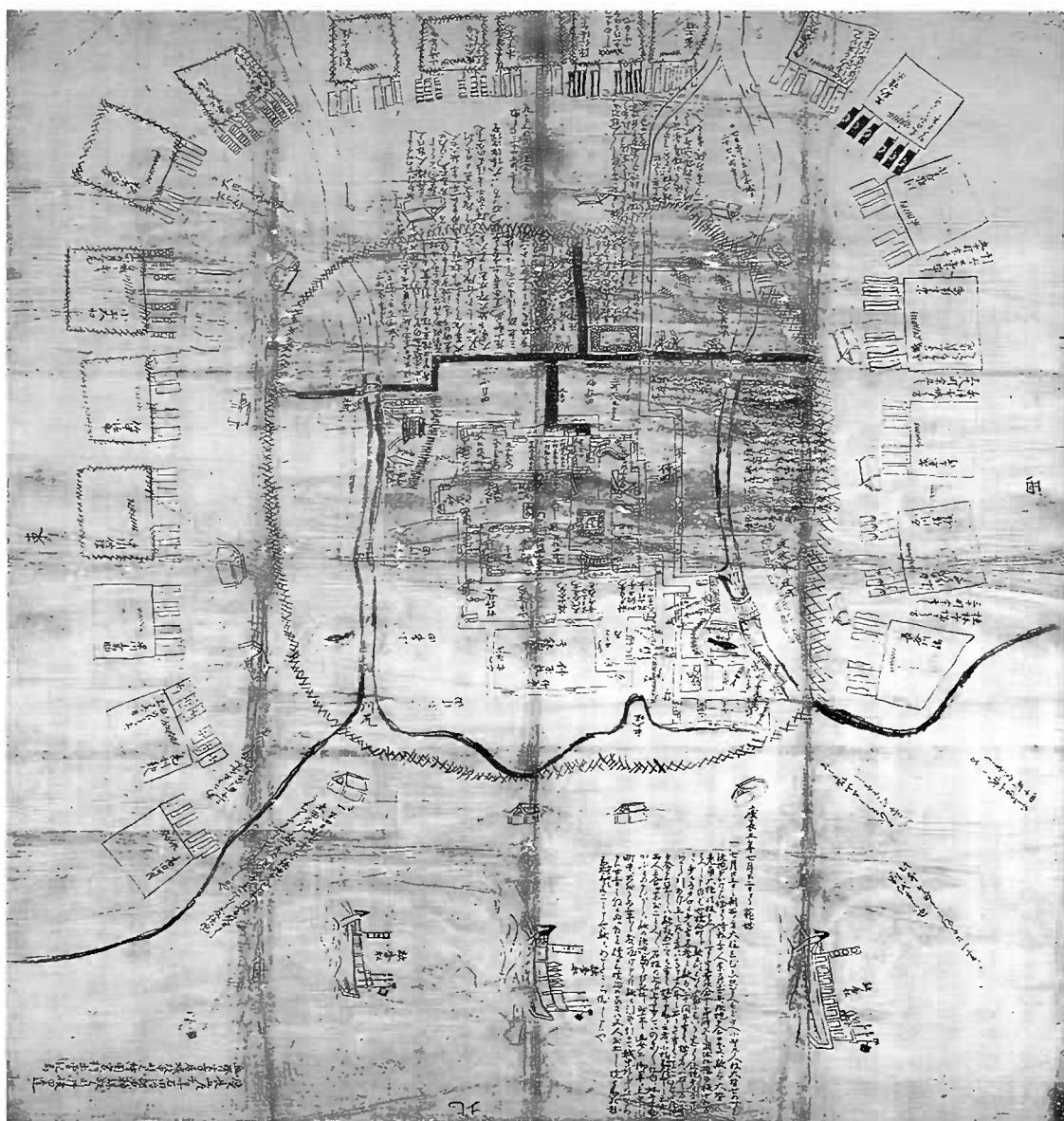
吉 村 豊 雄

今から半年ほど前だったろうか、近世専門部会で作業をしていたおり、市史編纂課の職員の方が一枚の絵図を持ってこられた。一見して「田辺籠城図」とわかった。田辺籠城の絵図は熊本大学附属図書館に寄託されている永青文庫資料で見た記憶があり、また関ヶ原合戦関係の図録でも何度も見てるので珍しいものではない。ただ、持つてこられた絵図は描き方もそれ程巧みでないだけに、なぜか心をひかれ、後日検討させてもらうことにした。

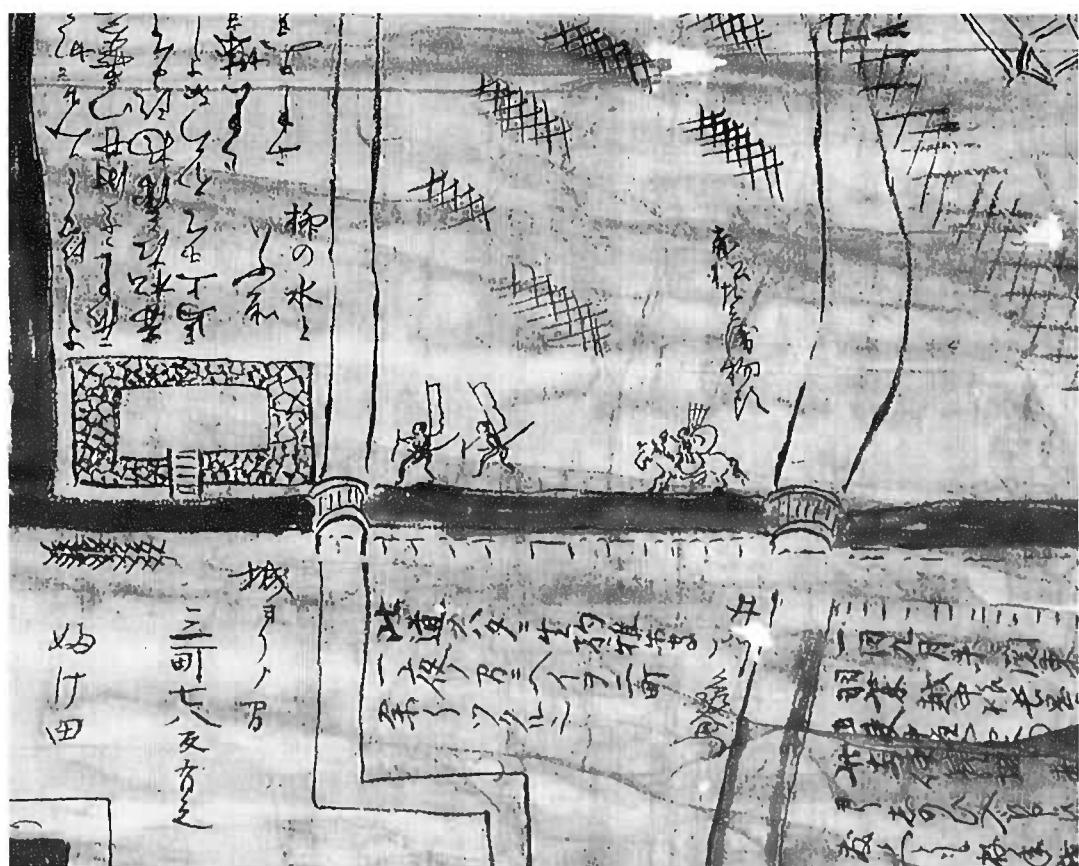
改めて調査してみて驚いたのは、本絵図の左下に「慶長庚子年石田治部少輔謀叛之時、丹後田辺幽斎玄旨居城攻申時之絵図、宮村出雲記焉」という記載があることである。「宮村出雲記しおわんぬ」とは、慶長五年（一六〇〇）九月の関ヶ原合戦の直前段階に、自ら丹後田辺城（京都府舞鶴市）に籠つて大坂（石田三成）方と戦った宮村出雲が書いたといふことになる。そして関係史料とつき合わ

せて検討してみると、本絵図は「田辺籠城図」の原図の可能性が高いとの認識をもつに至つた。

そこで、本年五月二十四日にこの新発見の



「田辺籠城図」を公表するとともに、ここに改めて本絵図の史料的価値についてご紹介する次第である。



本絵図は八代市内の旧細川家臣尾藤家の蔵で見つかったものである。尾藤家に本絵図が所伝された経緯は不明であるが、尾藤家と本絵図の伝来に直接の関係はなく、何らかの経緯で尾藤家が入手したものと思える。絵図は縦百二十一センチ、横百二十八・八センチで、和紙に墨で描き、大手口にいたる道筋と、敵方の旗印の一部を朱色で描いている。

本絵図の価値は、何といつても絵図の作成者が明らかのことである。前述したように、絵図自体に「宮村出雲記しおわんぬ」との記載がある。また宮村出雲（北村甚太郎）自身が本絵図を作成したこ

とあることからも明らかである。すなわち、百二十八・八センチで、和紙に墨で描き、大手口にいたる道筋と、敵方の旗印の一部を朱色で描いている。

本絵図は八代市内の旧細川家臣尾藤家の蔵で見つかったものである。尾藤家に本絵図が所伝された経緯は不明であるが、尾藤家と本絵図の伝来に直接の関係はなく、何らかの経緒で尾藤家が入手したものと思える。絵図は縦百二十一センチ、横百二十八・八センチで、和紙に墨で描き、大手口にいたる道筋と、敵方の旗印の一部を朱色で描いている。

之覚」（永青文庫蔵「達帳」）に、

(宮村出雲) 承応二年十月病死仕候、丹後御籠城有増之次第覚書一冊ニ仕、御城中御侍持口所々、寄手之陣所等、子孫為披見、出雲儀絵図仕、召置候を、于今所持仕居申候、

とあることからも明らかである。すなわち、承応二年（一六五三）に死んだ出雲が、子孫のために、田辺籠城戦のあらましを「覚書」一冊にまとめ、城中の侍の持口、敵方の陣場などを「絵図」にしたというのである。「覚書」とは「宮村出雲覚書」（別名「北村甚太郎覚書」・「丹後国田辺御籠城覚書」）のことであり、「絵図」とは本絵図（あるいは、その原図）のことである。

絵図の作成時期はよくわからないが、「由緒之覚」に、子孫に見せるために描いたとあるように、出雲の晩年、藩主忠利の死を機に法体となつた寛永十八年（一六四一）から承応二年までの間に絵筆をとつたものと考えられる。

そして宮村出雲作成の「覚書」と「絵図」は延宝七年（一六七九）に細川家に提出されている。当時細川家は財政改革の一環として

市史編さんだより

家中の給料カットを実施していたが、藩当局も由緒ある譜代的家臣には配慮したようであり、「丹後以来」の由緒をもつ宮村家は、初代出雲の「絵図并覚書」を提出し、扶持米の回復を求めている。

宮村家から提出された「絵図」は現在も熊本大学附属図書館寄託の永青文庫所蔵資料の中に存在する。「丹後田辺御籠城之図」（所蔵番号四十五印、廿六番）がそれであり、尾藤家旧蔵の絵図とほぼ同一の構図と内容であるが、墨一色で格段に美麗に描かれている。寄手の旗印の記述も簡略化され、人物も省略されて単に「敵」とのみ書かれている。つまり永青文庫の絵図は、宮村家が延宝七年に初代出雲作成の絵図を提出する際に別途作成し提出したものである。初代出雲自身の絵図は宮村家に残され、その後何らかの事情で尾藤家の所蔵となつたものと思える。

したがつて尾藤家旧蔵の絵図は、全国的に少なくとも五点は所在している「田辺籠城図」の原図といふべきものである。むろん原図の写しの可能性もあるが、専門絵師ではない、やや拙い描線、実際の体験をうかがわせる人物の動的描写など、原図のもつ説得力を感じる。

このように本絵図は、由来と伝来が明らかであり、数ある「田辺籠城図」の原図というべきものである。

また本絵図には田辺城各持場の戦闘状況についての解説がある。これらは「宮村出雲

（北村甚太郎）覚書」の記述と一致する。敵方の旗印の具体的な描写、田辺城を包囲した柵、番屋、番船の意味、大石火矢配備の事情、後に細川家に召出される敵方の井門龜右衛門の活躍など、「覚書」を読んで納得する。

「もう一つの関ヶ原合戦」というべき田辺籠城戦はこれまでほとんど検討されていないが、自ら籠城した宮村出雲が「絵図并覚書」を作成しており、本絵図はいわば解説書つき絵図となつていて。したがつて、本絵図は「宮村出雲覚書」をもとに読み解くことによつて、関ヶ原合戦の前哨戦といふべき、田辺籠城戦の実相と歴史的位置を究明するうえで、貴重な史料といえる。



日誌抄

1998年(平成10年)7月

1999年(平成11年)6月

平成10年

- | | |
|----------|--|
| 7・11 | 第49回近世専門部会(通史編「近世I」章立て) |
| 7・15 | 近代史料調査(熊日資料室にて熊日所蔵の軍関係資料調査) |
| 7・22 | 中世史料調査(専門部会の終息と資料集の作成) |
| 7・25(ほか) | 近代出張調査(防衛研究所、富岡製糸工場) |
| 7・28 | 自然史料調査(資料集「動植物目録」の打ち合わせ) |
| 7・30 | 近代史料調査(史料編「近代II」収録予定候補の分野別検討) |
| 8・8 | 近世史料調査(通史編「近世I」章立て) |
| 8・14 | 近代史料調査(史料編「近代II」収録予定候補の分野別検討) |
| 8・20 | 第57回部会長会議(部会間の調整事項) |
| 8・26 | 第49回近世専門部会(通史編「近世I・II」の執筆分担) |
| 9・1 | 近代史料調査(史料編「近代II」社会分野の収録候補検討) |
| 9・3 | 現代史料調査(通史編「現代II」第3編の編集) |
| 9・11 | 近代史料調査(史料編「近代II」収録予定候補の分野別検討) |
| 9・12 | 近世史料調査(通史編「近世I・II」の執筆分担最終決定と史料調査) |
| 9・21 | 近世史料調査(三宅家文書調査) |
| 9・23 | 新熊本市史編纂委員会視察研修(山梨県・旧陸沢学校校舎、旧春米学校校舎、着物博物館、旧尾島学校校舎、恵林寺、身延山久遠寺) |
| 10・3 | 近世・近代史料調査(通史編にかかる重複部分の調整会議) |
| 10・12 | 近世史料調査(北垣家文書調査) |

市史編さんだより

「熊本の中心・新市街 交差点の雑踏」

熊本市市史編纂室嘱託

薄田千穂

昭和六二年七月熊本市史編纂事業がはじまつたばかりの頃、東京から絵はがき八五枚のコピーが郵送されてきた。熊本の戦前の絵はがきがまとまつて手に入ったので購入しないかというのである。今回刊行の史料編第七卷近代IIの宣伝用ポスターに使用した「熊本の中心・新市街交差点の雑踏」と題する絵はがきは、その中の一枚である。熊本でみやげものとして買い求められ、今に至るまでどこかに保存されていたのは想像に難くない。戦前の絵はがきは現在のものとはちがつた雰囲気をもつてている。この絵はがきを中心にして、戦前の絵はがきについて少し検討してみようと思う。

日本で私製はがきの発行が認められたのは明治三三年一〇月の通信省令によってであつた。その後全国で名所絵はがきや年賀はがきなどが製作、販売されるようになる。日露戦争時には通信省から「戦役記念」絵はがきが次々に発行されてブームがおこり、普及していくつた。また、災害などの時事的な写真も絵はがきとして販売されるようになつていった。東京では、関東大震災の被害状況を写した写真が印刷され絵はがきとなつた。家が倒れ死



現在の新市街交差点

体が累々と重なる、今日の絵はがきからは想像のできない悲惨な写真である。戦前の様々な絵はがきは、写真とともに史料としても利用されている。

熊本市史では先述の絵はがきの購入から、折にふれ絵はがきを収集してきた。その中の「熊本百景」「熊本名所」と銘打った絵はがきには、水前寺、江津湖、新市街や上通など同じ構図のもののがかなりある。いずれも時代がちがうことがわかるので、時代を変えて何度

1・8	近代史料調査（史料編「近代II」に使用予定写真の検討）	近世・近代史料調査（通史編にかかる重複部分の調整会議）
平成11年		自然史料調査（資料集「動植物目録」の打ち合わせ）
12・22	第54回現代専門部会（通史編「現代II」の編集）	近代史料調査（史料編「近代II」社会分野の収録候補検討）
12・21	近世出張調査（和歌山県高野山赤松院、大阪城細川家文書）	第53回現代専門部会（通史編「現代II」第3編の編集）
12・15	近世史料調査（木村家文書調査）	第58回近代専門部会（史料編「近代II」収録予定候補の分野別検討、通史編にかかる近世部会との重複部分調整）
12・10	第59回近代専門部会（史料編「近代II」収録予定候補の分野別検討）	近世史料調査（通史編「近世I」の項目検討）
12・9	近世史料調査（木村家文書調査）	第24回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全国大会出席（那覇市））
12・9	近世史料調査委員会（平成10年度事業経過報告、部会間の調整事項）	近世史料調査（岡田家文書調査）
12・9	第23回新熊本市史編纂委員会（平成10年度事業経過報告）	第58回近代専門部会（史料編「近代II」収録予定候補の分野別検討）
12・9	第59回近代専門部会（史料編「近代II」収録予定候補の分野別検討）	近世史料調査（岡田家文書調査）
12・9	近世史料調査（木村家文書調査）	第23回新熊本市史編纂委員会（平成10年度事業経過報告）
12・9	近世史料調査（木村家文書調査）	第58回近代専門部会（史料編「近代II」収録予定候補の分野別検討）
12・11	第59回近代専門部会（北海道庁文書館、網走刑務所資料館ほか）	近世史料調査（通史編「近世I」の項目検討）
12・13	近世史料調査（通史編「近世I」の項目検討）	第59回近代専門部会（北海道庁文書館、網走刑務所資料館ほか）
12・15	近世史料調査（鷹野家文書調査）	近世史料調査（通史編「近世I」の項目検討）
12・21	近世出張調査（和歌山県高野山赤松院、大阪城細川家文書）	近世史料調査（通史編「近世I」の項目検討）
12・23	近世出張調査（和歌山県高野山赤松院、大阪城細川家文書）	近世史料調査（通史編「近世I」の項目検討）

も発行されていたことがうかがえる。熊本で

初めて写真絵はがきが製作されたのはいつか定かではないが、その需要は結構あつたと思われる。

ではこの「熊本の中心・新市街交差点の雑踏」から読み取れる情報を挙げてみよう。

まず場所、右端の電信柱に「辛島町東停留所」の文字が見える。その左の尖塔のある建物は映画館「世界館」であることから、今のがれくしん銀行本店あたりから見た新市街入口付近



昭和 6 から10年頃の新市街交差点

であることがわかる。

次に時代であるが、旗の立つているまん中の建物は、別の角度から写した写真から百貨店の「銀丁」であると思われる。この「銀丁」は昭和五年一〇月一一日の開店である。また、絵はがきの「世界館」は改築前の旧館であり、新館は昭和一〇年七月に起工しているのでそれ以前ということになる。さらに、道路の左側の「千徳百貨店」の看板に「春物子供用セーテー半額奉仕デー、春物子供帽子均一デー、特製かや大廉売」という宣伝文句があり、その内容から晩春から初夏にかけての季節であることが想像できる。

以上を総合すると、昭和六年から昭和一〇年の間であることが推定できる。

しかし、昭和六年一月に出版された写真帳に掲載されている写真には、右端電柱後ろの店の名前が、「アサヒ洋品店」となつており、この絵はがきとは違う。このことから昭和七年以降という推定もでき、さらに検討が必要である。

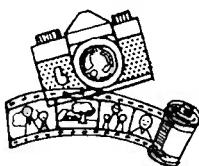
卷之二

推定に使用した情報は以上であるが、この絵葉書からは当時の様子が想像でき、興味が尽きない。「世界館」では「忠臣蔵」が上映されており、左側には花畠公園の楠と思われる木がのぞく。右手前には二人の着物の女性が、一人は和傘、一人は洋傘をさし、ゆつたりとした表情で歩いている。また正面手前に鉄砲を持った二人の兵士がおり、熊本城に第六師団を抱えた当時の熊本を象徴している。

今では車がひつきりなしに行き交う通りを、人や自転車がのんびり歩き、横断している。全体として、「雑踏」というには余りにものどかな昼夜の光景である。

さて、この昭和六〇一〇年はどういう時代であつただろうか。昭和六年九月に閏東軍が柳条湖事件を起こし、満州事変の火蓋を切る。七年に満州建国、八年日本は国際連盟を脱退する。長期にわたる戦争が始まる時期である。国内は昭和恐慌のさなかにあり、昭和七年には犬養首相が暗殺されたいわゆる五・一五事件によつて政党政治が断絶する。一〇年には天皇機関説問題が起つて、戦時体制への準備が着々と行われていく。熊本でも昭和六年に陸軍特別大演習が行はれ、七年には六師団が満州に動員されている。しかし、庶民の間ではまだ生活の統制もなく明るさの残る時代であった。一見のどかそうに見えるこの光景も時代背景をふまえてみると時代の表情がより浮かび上がつてくるような気がする。

以上、一枚の絵はがきから読み取れることを並べてきた。戦前の絵はがきからは当時の時代の雰囲気が感じとられ、庶民の生活が想像できて見飽くことがない。しかし、絵はがきにはわかっていないことも多い。これからさらに収集され研究されることが望まれる。



史料調査に御協力をいただいた方々

1998年（平成10年）7月～1999年（平成11年）6月

三宅	洋介	(新屋敷)	熊日情報開発局	福井市郷土歴史博物館
北垣	正	(坪井)	山内醤油	伊勢神宮文庫
鶏野	淑子	(妙体寺)	熊本大学付属図書館	永青文庫
岡田	一郎	(城山上代町)	八代市立博物館	赤松院
木村	秀雄・小出	隆	(田迎)	玉名歴史博物館
松山	峻弼		(松尾町)	宇土市市史編纂課
生駒	のぶよ・章一		(新屋敷)	菊鹿町教育委員会
坂田	祇彦		(出水)	臼杵市立図書館
白木	信博		(水前寺)	長崎市立博物館
友枝	久士		(上之郷)	九州大学大学院
宮本	恭輔		(松尾町)	比較社会文化研究科九州文化史研究所
吉村	圭四郎		(川尻町)	慶應義塾大学
両角	正夫		(玉名市)	劍八幡宮
土山	洸		(滋賀県)	福井市市史編纂室

敬称略

好評発売中
新刊案内



(全21巻)

第7回
配本

史料編 第七巻 近代II

- 「新熊本市史」では最後の史料編、「近代I」につづく近代史料編の続刊
- 日露戦争以降、太平洋戦争終結までの史料385点を収録
- 収録資料は未刊行・未発表のもの、既刊行・既発表のものでも一般には入手しがたいもの、あるいは基本的なものに重点を置いて選択
- 政治、行財政一般、都市行政、産業・経済、軍事・警察・消防・空襲、社会、教育、文化・宗教の8章で構成

新刊	史料編 第7巻 近代II	頒布価格 4,800円
既刊	通史編 第1巻 自然・原始・古代	頒布価格 5,000円
	通史編 第2巻 中世	頒布価格 4,300円
	通史編 第8巻 現代I	頒布価格 4,300円
	史料編 第1巻 考古資料	頒布価格 5,700円
	史料編 第2巻 古代・中世	頒布価格 3,700円
	史料編 第3巻 近世I	頒布価格 3,700円
	史料編 第4巻 近世II	頒布価格 4,800円
	史料編 第5巻 近世III	頒布価格 4,800円
	史料編 第6巻 近代I	頒布価格 4,800円
	史料編 第8巻 現代	頒布価格 3,700円
	史料編 第9巻 新聞上近代	頒布価格 3,700円
	史料編 第9巻 新聞下近代	頒布価格 3,700円
	別編 第1巻 絵図・地図	頒布価格 10,300円
	別編 第2巻 民俗・文化財	頒布価格 5,300円

問い合わせ先

〒860-8601
熊本市手取本町1-1
熊本市市史編纂室
☎(096)328-2038

申込み先

〒860-0083
熊本市大窪1丁目7-47
熊本県書店商業組合
☎(096)344-3831
Fax(096)344-5420

編集後記

くまもと未来国体が39年ぶりに今夏、今秋に開催されました。国民体育大会は戦後間もない阪神地域で初めて開催されました。その後、全国を一巡し、昭和63年の京都大会から2巡目に入り、くまもと未来国体が54回目の開催となりました。熊本市では、開会式・閉会式をはじめ12競技の開催地で白熱した熱戦が繰り広げられました。

▽ 次回の配本は、「通史編第九巻現代II」を予定しております。これは、「通史編第八巻現代I」の続刊で昭和47年から平成11年度までを収録しており、くまもと未来国体も収録予定としております。

▽ 現代専門部会の専門員の先生方には、現在、執筆・編集作業に昼夜を分かたぬ御努力をいたしております。御期待ください。

▽ 本田秀人氏（熊本県立図書館嘱託）が平成11年4月15日で御勇退されました。

▽ 本田専門員は、「史料編近世I・II・III」、「別編絵図・地図」の編集・刊行にご尽力をいたしました。ここに心よりお札を申し上げます。

▽ 4月1日の機構改革により、市史編纂課が市史編纂室に変わりました。

史料の提供にご協力を
皆さんの身近に「史料」がありましたら、
ご提供をお願いします。

熊本市史編纂室
〒860-8601 熊本市手取本町1-1
096-328-2038